

重紐をめぐる幾つかの問題(1)

—重紐の紐とは—

吉池孝一・中村雅之

1. 重紐の概略

中村：今回からは中国語音韻史研究の中でも、一時期盛んに議論された中古音の重紐（じゅうちゅう）について話し合いたいと思います。とはいえ、音韻史上の問題に正面から取り組むというよりは、やや周辺的な話題を取り上げていきます。最初はまず、重紐とは何か、あるいは重紐の「紐」とは何かということを問題にしたいのですが。

吉池：まずは、重紐という現象の概略、その現象を重紐と名付けた経緯の確認ですね。

中村：後代に「重紐」と呼ばれることになる現象の概略を、有坂秀世(1937-1939;1957)<sup>1</sup>によってみます。なお有坂は重紐という用語は使用しません。有坂によると、「さて、切韻・廣韻の反切は、その本来の目的から考へる時は、一つ一つが相異なる音を表すものでなければならない。然る處、廣韻の中には、切字も同母、韻字も同韻であつて、一見互に同音であるかの如く見える反切が、幾對か存在する。左にその例を挙げよう。」と述べ、69對の小韻代表字とそれに付された反切を挙げます。69對のうち最初と二番目の二例の對を挙げると次のとおりです。

(1) 鉞（敷羈切）𪔑（匹支切）共に支韻開口滂母

(2) 皮（符羈切）陣（符支切）共に支韻開口並母

・・・以下省略・・・

吉池：引用文中の用語の確認ですが、「切字」は反切上字で、「韻字」は反切下字ですね。

さて、有坂氏が挙げた69對は正確ではない部分が有るようですが<sup>2</sup>、今は重紐の概略を知ることが目的ですので詳細は後の議論に回しましょう。上記の二例のうち、(2)は重紐の例としてそのまま使えそうです。宋代の『廣韻』の記述を確認すると次の通りです。「○」記号の次に漢字の「皮」がありその次に5字が並んでおり合計で6字となっています。「陣」

<sup>1</sup> 有坂秀世(1937-1939;1957)「カーグレン氏の拗音説を評す」『音声学協会会報』49, 51, 53, 58, 『国語音韻史の研究』(1957)327-357。

<sup>2</sup> 平山久雄(2022)の李榮『切韻音系』に基づいた表、および上田正(1975)は、重紐のペアとして𪔑（彼爲切）と卑（府移切）を挙げる。このペアは『廣韻』に有るにもかかわらず、有坂氏の69對の中には含まれない。上田正(1975)『切韻諸本反切総覧』(均社単刊第一) 京都大学・文学部中文研究室均社、13-15頁。平山久雄(2022)『中古音講義』汲古書院、122頁。

の次に 14 字が並んでおり合計で 15 字となっています。それぞれの字に付された義注（意味の注）は省略します。

○皮 符羈切六 疲 郵 罷 裨 擺

○陴 符支切十五 𪔐 裨 脾 𪔑 埤 裨 𪔒 𪔓 𪔔 𪔕 𪔖 𪔗 𪔘 𪔙 𪔚 𪔛

中村：「皮」の音は反切「符羈切」で記され同音の字が 6 字並んでいます。他方の「陴」の音は反切「符支切」で記され同音の字が 15 字並んでいます。両者の違いについて有坂氏は、韻図の『韻鏡』や外国漢字音などを利用します。『韻鏡』は、漢字音の母音の広狭の差異を 4 段階の等位に分けて並べた表とされます。重紐の一方である「皮」は 3 等欄に置かれ、他の一方である「陴」は 4 等欄に置かれます。有坂秀世(1937-1939;1957)は 3 等欄に置かれた字の介音を非口蓋的な  $\text{ɨ}$  とし、4 等欄に置かれた字の介音を口蓋的な  $\text{i}$  とし、一見同音と見える重紐の違いを、介音の違いとしました。このような音の違いのペアを、有坂秀世以降、ある時期から重紐と呼ぶようになります。また、重紐の 3 等字を B 類字、重紐の 4 等字を A 類字と呼び習わしています。

吉池：3 等を B 類、4 等を A 類と命名したわけですね。等位の順番をそのまま利用して、3 等を A 類、4 等を B 類としてもよかったです、そのようにはしなかった。

中村：命名した時の事情が反映しているのでしょうか。A 類と B 類の命名も含めて、用語について気になる点は少なくありません。A 類 B 類については後に触れるとして、まずは、重紐という現象を、なぜ“重複した紐”、すなわち“重紐”と呼ぶのか、この場合の紐とは何かということを確認しましょう。

## 2. 重紐用語二説

吉池：重紐という音韻現象自体についての認識は、どの研究者に於いてもそれほど大きな違いは無いように見えます。ところが、重紐という用語の理解は、大きく異なるようです。

中村：重紐という用語の理解について、説は二つあります。一つは、紐を小韻とし、重複した小韻とする説（紐＝小韻説）。他の一つは、紐を声母とする説（紐＝声母説）。後者の紐＝声母説に立った場合、「重紐」という用語の解説はやや複雑になります。

吉池：中国で出版された『中国大百科全書 語言 文字』（1988 年）<sup>3</sup>の、邵榮芬氏の「《切韻》音」（318-322 頁）の記述に次のようにあります。なお、『大百科全書』には「重紐」という独立した項目は無く、邵榮芬氏による「切韻」の音の解説の一部として出てきます。

---

<sup>3</sup>『中国大百科全書 語言 文字』北京：中国大百科全書出版社。

「所謂重紐是指支，脂，祭，真，仙，宵，侵，塩八韻中唇牙喉音兩套對立的小韻而言。」  
(321 頁)。

中村：この記述を要するに「いわゆる重紐とは、唇牙喉音における、2組の対立した小韻を指して言う」です。記述が簡潔でかえって理解しにくいのですが、重紐を重複した小韻とし、声母の重複とは関係を付けてはいない、と見ることができそうです。もっとも、重紐の紐とは何かということについて明言しません。重紐の紐とは何かについては、あいまいです。これを一応、紐=?小韻説としておきましょう。

もう一つの説の方は『中国語学辞典』(2022年)<sup>4</sup>にありますね。

吉池：日本で出版された『中国語学辞典』の、遠藤光暁・秋谷裕幸両氏の「重紐」の項に次のようにあります。

「《切韻》《広韻》平声の支・脂・祭・真(《広韻》では諄も)・仙・宵・侵・塩の各韻(および相配する上去入声，後も同じ)には唇音・牙喉音の小韻が開合による区別の他に更に重複して現れ，声母を「紐」ともいうので，この現象を「重紐」，即ち同声母小韻が1韻内で重なったもの，と呼ぶ。」(262頁)

中村：小韻の重複に言及しますが、紐=小韻と捉えているわけではなく、紐=声母とした上で、重紐という用語を理解している、と見るができそうです。これを紐=声母説としておきましょう。

吉池：用語に関わる2つの記述を見たわけですが、あるいは中国と日本の学界では、用語の理解に何らかの異なりがあるかもしれませんね。

中村：頼惟勤(1982)「中國音韻史上の問題点」<sup>5</sup>にある重紐現象に言及した初期の文献を確認しましょう。

### 3. 初期の重紐文献

吉池：頼惟勤(1982)によると初期の重紐に関わる文献は次のとおりです。なお、\*はいま追加したもので頼惟勤(1982)にはありません。重紐という用語の有無、重紐の「紐」の解説の有無を表にしました(表1)。また、重紐という現象、もしくは重紐という用語をどのように説明しているかについて「」内に記しました。なお引用文に付した下線        は対談者によるものです。

<sup>4</sup> 日本中国語学会編(2022)『中国語学辞典』東京：岩波書店。

<sup>5</sup> 『お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要』第27号、1982年。『頼惟勤著作集I 中國音韻論集』汲古書院所収、1989年、30-46頁による。

表 1. 初期の重紐文献 (01~25)

		重紐の用語	紐の解説
01. 有坂秀世(1935)	萬葉假名雜考	無	無
<p>(『国語研究』第3巻第7号。『国語音韻史の研究増補新版』三省堂所収、1980年第7刷、557-561頁による。)</p> <p>「拗音的要素に、前舌性・中舌性の區別を認める」(561頁)</p>			
02. 有坂秀世(1936)	漢字の朝鮮音について(下)	無	無
<p>(『方言』第6巻第5號。『国語音韻史の研究増補新版』三省堂所収「漢字の朝鮮音について」(上、下を合わせたもの)、1980年第7刷、303-326頁による。)</p> <p>「拗音的要素に少なくとも二種あつた」(320頁)</p>			
03. 有坂秀世(1937-1939)	カーグレン氏の拗音説を評す(一)~(四)	無	無
<p>(『音聲學協會會報』1937年第49, 1938年51, 53, 1939年58号。『国語音韻史の研究増補新版』三省堂所収「カーグレン氏の拗音説を評す」、1980年第7刷、327-357頁による。)</p> <p>「廣韻の中には、切字も同母、韻字も同韻であつて、一見互に同音であるかの如く見える反切が、幾對か存在する。」(331頁)</p>			
04. 陸志韋(1939)	證廣韻五十一聲類	無	無
<p>(『燕京學報』第25期、1939年、1-58頁+表2)</p> <p>重紐現象の検討は「附録(一)陳澧廣韻韻類考校補」(30~49頁)が相当する。その内、支紙眞を四類に分ける箇所の注記(2)に次のようにある。「廣韻凡一韻二類者，東戈等特殊情形不計外，<u>宋</u>人類皆作同等一開一合，凡一韻在<u>陳</u>表作三類或四類者，其字<u>宋</u>人大都作三四等。<u>高本漢</u>分三四等韻爲三種格式【<math>\alpha \beta \gamma</math> : 对談者】，説見 <i>The Reconstruction of Ancient Chinese</i>, 通報 Série II, 21, 1922, 頁 24-32, 乃指每韻開合二類，或祇具一類者而言。間嘗依其格式整理支脂等系，時覺格不相入。茲所謂韻類者，未必全當於音理。」(31頁)</p>			
05. 河野六郎(1939)	朝鮮漢字音の一特質	無	無
<p>(『言語研究』3, 1939年。『河野六郎著作集2 中国音韻学論文集』平凡社所収、1979年、155-180頁による。)</p> <p>「甲 -i- 乙 -ī- 丙 -ī<sup>w</sup>- 丁 -ī<sup>w</sup>- の如き音價を推定することが出来る。」(174頁)「玉篇・切韻及び韻英を分析する事に依り、又此等と朝鮮漢字音との比較に依り、六朝より唐初にかけて、江南にも、中原にも、或は關中にも牙喉音字に四類の介音が實際に存した事を知つた。」(179頁)</p>			
06. 陸志韋(1939)	三四等與所謂‘喻化’	無	無

(『燕京學報』第26期、1939年、143-173頁)

「法言之世，三四等合韻中之重出小韻，在若種方言中必不同音讀。」(136頁)

07. 有坂秀世(1940) 先秦音の研究と拗音的要素の問題 無 無

(『音聲學協會會報』1940年第60,61号。『国語音韻史の研究増補新版』三省堂所収、1980年第7刷、365-368頁による。)

「古代支那語の拗音的要素に存在した  $i$  と  $\ddot{i}$  との區別は、先秦時代の古音を研究するためにも、重大な意義を持つものである。それは、頭音の問題にも韻の問題にも關係する。」(368頁)

08. 趙元任(1941) Distinction within Ancient Chinese 無 無

(*Harvard Journal of Asiatic Studies* Vol. 5-3/4, pp. 203-233. 雑誌の年度は1940年、刊行は1941年)

“In the rime 支 KARLGREN recognizes only two finals, one *k'ai k'ou* and one *ho k'ou*. But if we examine the *fan ch'ieh* in the rime, there are three forms for initial *k*, three for *k'*, three for *g'*, four for *x*, three for  $\cdot$ , and three for *ts*. For example,

犧許羈 <i>xiě</i>	[靡+下に手]許爲 <i>xjwiě</i>
訖香支 <i>xiě</i>	陸許規 <i>xjwiě</i>

KARLGREN does not differentiate the first row from the second. CH'EN LI [陳澧: 對談者] recognizes these distinctions in his *Ch'ieh yün k'ao* [切韻考: 對談者] as well as in *Ch'ieh yün k'ao wai p'ien* [切韻考外篇: 對談者] and follows the practice of the Sung rime tables in calling them division III and division IV. As these have nothing to do with yod (許許許香 being all synonymously *xj* even from KARLGREN's point of view), the meaning of III and IV must lie somewhere else, and we shall leave it to future investigation.” (pp. 220-221)

09. 王靜如(1941) 論開合口 無 無

(『燕京學報』第29期、1941年、143-192頁)

「切韻於一二四等中未見有此重出小韻而獨於三等中見之，又何奇巧若此。」(157頁)

10. Nagel, Paul (1942) Beiträge zur Rekonstruktion der 切韻 Ts'ieh-yün Sprache auf Grund von 陳澧 Ch'en Li's 切韻考 Ts'ieh-yün-K'au 無 無

(*通報 T'OUNG PAO*, VOL. 36, pp. 95-158)

“Aber in einer Reihe von Fällen hat er zwei 韻類 *yün-lei* aufgestellt, wo Karlgren nur eine einzige Finale hat. Äusserlich kommt dies in seinen Tabellen dadurch zum Ausdruck, dass bei den betreffenden Reimen die zugehörigen Silben in zwei Zeilen stehen, während sie nach Karlgrens Lautschema nur eine einzige Zeile bilden müssten. Sehen wir nun die so entstandenen doppelten Zeilen durch, dann finden wir besonders Silben mit gutturalen (einschl. laryngalen) und labialen Anlauten, die das *Kuang-yün* mit verschiedener *fan-ts'ieh* schreibt und als besondere Silben (條

tiau, 紐 niu) aufführt, die demnach Ch'en Li als heterophon betrachtet und in zwei verschiedenen Zeilen unterbringt, und für die er deshalb zwei 韻類 *yün-lei* aufstellt, die aber nach Karlgrens Lautschema und Rekonstruktion homophon sind.” (pp. 115-116)

11. 董同龢(1944) 上古音韻表稿 有 無

(中央研究院歷史語言研究所單刊甲種之二十一、1944年12月四川李莊石印出版(百冊のみ)。1944年初版本は未見。『歷史語言研究所集刊』第十八本, 1948年商務印書館重版による。)

「用以上所訂的標準把“脂”與“微”分部是有什麼意義呢? 第一, 非但是由詩韻與諧聲我們可以看得出脂部字跟微部字本來是分居劃然的, 即在廣韻, 他們還是留下了許多區分不混的痕跡。請看脂韻的“重紐”:

平	上	去
丕: 紕	鄙: 匕	痹: 秘
邳: [田+比]	否: 牝	凵: 屁
達: 葵	軌: 癸	鼻: 備
		寐: 郢
		器: 棄
		媿: 季
		匱: 悻

這些不同音切的字向來是沒有法子解釋的。但是如從上古來源方面去推求, 問題就大致清楚了。」(70頁)

12. 董同龢(1945) 廣韻重紐試釋 有 無

(『六同別錄』上冊(臺北: 中央研究院歷史語言研究所, 1945年。『六同別錄』は未見。『中央研究院歷史語言研究所集刊』第13本、1-20頁、1948年による。)

「“重紐”在廣韻中是些很值得注意的現象。他們的絕大多數都是在幾個三等韻裏。並且, 除去幾個特殊的例子, 又完全結集於唇牙喉音。對於他們, 一向還沒有人能說出所以然來。」(1頁)、「看到韻圖, 支脂眞(諄)仙祭宵諸韻的分類情形就清楚得多了。在時代較早的通志七音略與韻鏡裏, 這幾韻的唇牙喉音都是受着兩種不同的處置: 一類排在三等, 一類排在四等。‘重紐’字在韻書中無法分的, 也都各得歸宿, 分居不紊。」(5頁)

13. 周法高(1945) 廣韻重紐的研究 有 無(紐=?声母 or?小韻)

(『六同別錄』上冊(臺北: 中央研究院歷史語言研究所, 1945年。『六同別錄』は未見。『中央研究院歷史語言研究所集刊』第13本、49-117頁、1948年による。)

①「當我們打開廣韻時, 有時不免發現在一般人所承認的韻類中, 在同聲紐下, 會遇到兩個反切——這就是本篇中的所謂重紐(例見後), 」(49頁)。ここに「(例見後)」とある例の部分は②の通り。

②「現在我把重紐都抄下來。唇音的切語下字, 不管開合, 我一律把唇音抄在開口下面, 理由見第四節。重紐大多是唇牙喉音, 在韻鏡, 七音略裏分列在三四等, 就是本文所分的A B類。現在大致把列在四等的A類排在前, 列在三等的B類排在後。……略……, 注的數字代表本切語所收的字數。

支開 曉 訖 (香支, 二) 犧 (許羈, 十八)  
 羣 祇 (巨支, 二五) 奇 (渠羈, 十)  
 邦 卑 (府移, 十一) 陂 (彼爲, 十一)  
 ……略……

紙開

溪 企 (兵弭, 二) 綺 (墟彼, 七) (企紐近韻末, 切韻無, 出後增。)  
 ……略……

眞開

合 見 均 (居勻, 四) 麿 (居筠, 六) (均紐廣韻隸諄韻, 切三不分眞諄, 又無麿紐。)  
 ……略……」 (51-56 頁)

①の「在同聲紐下, 會遇到兩個反切」(同聲母の下で, 二種の反切に出くわす)は「重紐」を定義した部分である。声母が同じ二種の反切を重紐と呼ぶことになり、重紐の紐は声母と理解できる。第二章で「來紐」「明紐」「幫紐」「溪紐」などとするので、紐=声母として矛盾はない。しかし、②の( )内の注記にある「企紐」「均紐」「麿紐」は、企小韻、均小韻、麿小韻であり、紐=小韻にほかならず、上の重紐の挙例は同一声母の小韻を重複して配置したものである。そうすると、重紐の紐は小韻と理解できる。紐は、小韻とも声母とも理解することができる。

14. 陸志韋(1947) 古音說畧 無 無

(燕京學報專号第 20 期、1947 年。『陸志韋語言學著作集(一)』中華書局、1985 年による。「卷首《切韻》的音值」(1-60 頁)の各所に重紐現象の記述がある。注において「付印以後, 才讀到《六同別錄》(中央研究院史語所油印)所載的董同龢《廣韻重紐試釋》、周法高《廣韻重紐的研究》(1944)。跟王說部分相同。」(19 頁)とあるが、自らの文章の中で重紐という用語は使用しない。)

「在支脂等三四等韻裏面, 同一聲母之下, 同是開口或是合口, 同一類切上字, 可是這樣的字在等韻有時作三等, 有時作四等。」(5 頁)、「實際上《廣韻》跟《韻鏡》很少在同一聲母之下並列四個小韻的例子, 像支韻“犧, 許羈切”開三; “訖, 香支切”開四; “[麿+下に手], 許爲切”合三; “陸, 許規切”合四。」(25 頁)

15. 周法高(1948) 古音中的三等韻兼論古音的寫法 有 無

(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第 19 本、203-233 頁、1948 年。)

「自從重紐問題重新提出討論後, 對於古音的研究又有了一點進展, 使複雜的三等韻更複雜了。在國內有董同龢先生的廣韻重紐試釋和我的廣韻重紐的研究同時發表了。在國外, 也有 Paul Nagel 的根據陳澧切韻考對於切韻擬音的貢獻(Beiträge zur Rekonstruktion der 切韻 Ts'ieh-yün Sprache auf Grund von 陳澧 Ch'en Li's 切韻考 Ts'ieh-yün-K'au)。」(203 頁)

16. 王靜如(1948) 論古漢語之腭介音 有 紐=声母

(『燕京學報』第35期、1948年、58-94頁)。下線\_\_\_\_\_は対談者による。

- ①「第一類支、脂、仙、眞、諄、寘、鹽、侵、祭等韻系の牙喉唇音，不論按反切或宋人韻圖，在同一聲紐，同一種呼之内，常有兩套重複的小韻。」(52頁)、「第一類韻系中，如支、脂、眞(諄)、仙、祭、寘、侵、鹽等諸韻系の唇牙喉聲紐下，却有重複小韻的反切。」(59頁)、「如此，將何以解甲、乙兩組諸反切小韻重複之現象乎？高氏或以一組爲後來之演變，成爲例外。吾等早以指出此等重複小韻(今人簡稱重紐)，在上舉支、脂等九韻系裏爲數極多(九韻系重紐詳情，參看本文附錄一)，決不能以例外視之。」(60頁)
- ②「論第一類韻之重紐小韻及宋圖分等，說明腭介音強弱之分」(58頁)、「此等重紐小韻，既爲有系統之分立，其音必有小異，前已言是。」(61頁)、「第一類韻中重紐小韻之甲組得列入四等者，自是其腭介音與四等相同(即強介音*i*)，方爲合理。」(62頁)、「切韻和廣韻在第一類韻系中的重複聲紐小韻甲、乙兩組既然和宋圖三、四等的排列相同，而且我們已經推測這是腭介音不同的原故，又知甲組腭介音較強，乙組腭介音較弱。」(62頁)、「其變化相異之點，端在同韻兩組之分，與前述聲紐重複小韻，宋韻圖在同韻中唇音之分三、四等均相吻合。」(67頁)、「在第一類韻系中牙、喉音重紐小韻的韻，我曾把他的反切下字分開合一律檢出。」(72頁)

①の「重複小韻」の言い換えが「重紐」であるならば、重紐の紐＝小韻と理解することができる。しかし、②を見ると「重紐小韻」いう表現が散見される。この「重紐小韻」が何を表すか、「重複聲紐小韻」もしくは「聲紐重複小韻」をつづめた表現と見るならば、重(複聲)紐小韻であり、紐＝聲紐(声母)となる。ただし、これは王静如の解釈である。当時新たに用いられ始めた「重紐」という用語が十分に馴染んでいなかったために、②のように「重紐小韻」「重複聲紐小韻」「聲紐重複小韻」という説明的な表現をしたものと考えられる。

17. 藤堂明保(1949) 支那音韻學と萬葉ガナの母音系 無 無

(『斯文』第二號、1949年、3-5頁)

「切韻のみを手懸りとして甲乙兩類を區別することはできない。そこで一步溯つて上古韻に據つてみると、同じ中古の支韻でも上古の「支」部系のものは悉く甲類に入り(支岐卑辟等)、之に反して上古の「歌」部系の字はすべて乙類に現われる(奇寄彼被)。してみると萬葉ガナの母音系は、中古音(切韻)のみによつては理解せられず、それよりもやゝ上古韻に近い三國六朝音系によらねばならぬことが判明する。」(3頁)

18. 藤堂明保(1949) 萬葉ガナの甲乙類と中古漢語の3・4等の本質 無 無

(『中国語學』27、1949年、1-2頁)

「上古に於いて喉牙唇音及び舌齒音に口蓋的な*i*が伴ったとき、中古(切韻時代)では3・4等兩属韻の喉牙唇音4等と舌齒音になり；上古に於いて喉牙唇音に非口蓋的な*i*が伴ったとき、中古では3・4等兩属韻の喉牙唇音3等と3等專屬韻となり；且つ上古に於いて、舌齒音は非口蓋的な*i*を伴うことはなかった、と考えられる。」(1頁)

19. 三根谷徹(1949) 輕唇音化の問題 無 無  
 (『中国語學』27、1949年、2-3頁)  
 「輕唇音化の起こったのは有坂・河野両氏の乙類の介音(中舌的な*-i-*)をとる場合いであることは明きらかである」(2頁)
20. 頼惟勤(1949) 重紐問題 有 無  
 (『中国語學』27、1949年、3-4頁)  
 「広韻の中には、切字も韻字も同音であつて、一見互に同音であるかと思われる反切が幾対か存在する。これを重紐と名づけるが、広韻の中にその存在を確認したのは陳澧である。」(3頁)
- \*21. 藤堂明保(1950) 中古漢語の音韻論的対立 有 無(紐=?声母)  
 (『日本中國學會報』第一、1950(昭和25年3月30日発行)年、55-96頁。表紙は昭和24年、目次は1949年とする。)  
 「廣韻の反切は本來一つづつ異つた發音を示す筈であるが、一つの拗音韻の中に、同一頭音の反切が二回現れて、一見すれば恰も重複したような觀を呈する者が少くない。これを「重紐」という。例えば廣韻支韻開口の反切を、廣韻について調べてみると、先づ○奇 渠羈切 10 とあつて例字をあげた後、更に○祇 巨支切 35 が重出している。「渠、巨」は同じく頭音 *g*\*を示すのであるから、これは同紐の反切が重出したことになる。」(74頁)
22. 周法高(1952) 三等韻重唇音反切上字研究 無 無  
 (『中央研究院歷史語言研究所集刊』第23本下、203-233頁、1952年。)  
 「爲稱說方便計，我們管三四等合韻中四等的重唇音叫A類(元音 *e*、*ə*)，三等的重唇音叫B類(元音 *ɛ*、*ɛ̃*)，純三等的輕唇音叫C類(元音 *ɐ*、*ə*、*o*、*u*)。A、B兩類唇音不互相用來作反切上字，可是因爲A、B兩類都有時用C類作切語上字，所以A、B、C三類便系聯在一起了。」(385頁)
23. 三根谷徹(1953) 韻鏡の三・四等について 有 無  
 (『言語研究』第22・23号、1953年。『中古漢語と越南漢字音』汲古書院所収、1993年、45-62頁による。)  
 「いわゆる重紐とは「切字【反切上字】も同母，韻字【反切下字】も同韻であつて、一見互に同音であるかの如く見える反切が，幾対か存在する」事象に対して中国の学者の用いる用語で，はやく有坂博士によつて解明せられたが，近年中国においても中古音研究の中心課題の一つとなっていることは周知の事実である。」(48頁)
24. 辻本春彦(1954) いわゆる三等重紐の問題 有 無  
 (『中國語學研究會會報』24、6-9頁、1954年)

「いわゆる三等重紐の問題でとりあげられる韻部は支脂祭真諄仙宵侵塩と庚清である。これらの韻部の唇牙喉音に属する字が韻図においてたまたま三等四等にまたがる（三等をB類、四等をA類として区別する）所から問題が出て来たわけであるが、実をいえばその他の三等韻についても検討を加える必要がある。」（6頁）。「従来この問題を解決するのに専ら反切下字の調査に終始し、反切上字に検討を加えなかったことは大きな手落ちといわねばならぬ。すなわち、反切上字がA類に属するものはすべてA類、反切上字がB類に属するものはすべてB類という事実注意到する必要がある。」（7頁）

\*25. 藤堂明保(1957) 『中国語音韻論』 有 無

(『中国語音韻論』江南書院、1957年)

「かような拗音韻のうちで、同じ/k/, 同じ/p/, 同じ/・/などの共通聲母について、二回反切があらわれ、一見するとまるで重複したように思われるものを「重紐」と呼ぶ。」（183頁）

.....

\*26. 平山久雄(1967) 「中古漢語の音韻」 有 紐=声母

(『中国文化叢書1 言語』大修館書店、初版1967年。五版1981年による。)

「このような pair は、反切系聯の結果では下字が系聯してしまうことが少なくない。その場合には、同一声母が同一韻母と重複して結合している観を呈する。声母を<紐>ともいうので、したがって<重紐>と呼ぶのである。」(149頁)

中村：表1を、中国の文献を中心にながめてみましょう。

#### 4. 重紐という用語の誕生

中村：表1によると、重紐という用語の初出は、11. 董同龢(1944)『上古音韻表稿』ですね。

吉池：1944年の初版本は未見で、1948年の重版本での確認なので不安は残ります。初版本の確認は後の課題として、とりあえず当該部分の表現は、初版も重版も同様であったと見なして議論をすすめましょう。

中村：董同龢(1944)では重紐という用語の説明はありません。唐突に重紐という用語を利用しているという印象を受けます。おそらく、これ以前に、既にこの用語は使用されており、それを引用したと見ていいのでしょうか。

吉池：確認できる初出は董同龢(1944)ですが、04. 陸志韋(1939)「證廣韻五十一聲類」以降、11. 董同龢(1944)『上古音韻表稿』以前の5年の間に生まれた用語なのでしょうね。

中村：重紐という用語が誕生した頃、重紐の紐は何を指していたかを問題としたいのですが、まずはその前に、“紐”自体の用法にどのようなものがあるか確認しておきましょう。

## 5. 紐が指すもの

中村：中国と日本での紐の理解は異なるようです。それを示す好例があります。慶谷壽信・佐藤進編訳 李思敬著『音韻のはなし』<sup>6</sup>です。李氏の本文の訳に「ふたつの○印には含まれた一組の文字はすべて同音の文字であって、これを「小韻」あるいは「紐」とよぶ。」(82頁)とあります。これに対して、訳者注の(1)で、「「紐」は、普通、「声紐」(声母のこと)の意味で使う。」(144頁)とします。

吉池：訳注の“普通”という言い方ですが、“日本では普通、紐を声母の意味で使う”と理解できます。もっとも紐＝小韻という説は普通ではない、と批判しているように読むことも可能です。中国と日本の用法を網羅するわけにはいきませんが、代表的なものを確認しておきましょう。

中村：日中の語学辞典の記述はいかがでしょう。

吉池：先に挙げた中国の『中国大百科全書』と日本の『中国語学辞典』の“紐”に関わる記述を確認すると。次のとおりです。

・『中国大百科全書』(1988年)

「声紐 (initials) 漢語声母的別名，也称紐或音紐。最初指韻書每韻中的小韻，一个小韻称一紐。后来等韻興起，把一个字音分析成声母、韻母兩部分，于是声母也就沿用了声紐這一名称。」謝紀鋒「声紐」345頁。

・『中国語学辞典』(2022年)

中国伝統音韻学の用語。「ある音韻的特徴を共有する字を1類にまとめる」意味。名詞“紐”の用法は以下のとおり大別され、中国音韻学にとっては(1)が最も重要である。

(1) 四声一紐：声母・韻母が同じで四声だけ異なった字を同“紐”と定義する。

(2) 反紐：《大広益会玉篇》の「四声五音九弄反紐図」や日本伝来の「九弄十紐図」は、反切の上・下字と被切字の音韻上の関係を図示する。

(3) 《文鏡秘府論・西卷》には五言詩“傍紐”“正紐”の禁則がある。

(4) 声母：章炳麟(1869-1936)《古音娘日二紐埤泥説》以外に古い用例がなく、章炳麟の作った用語ではないかとされる(潘重規・陳紹棠 1978)。【以上趣意】蕭振豪「紐」409頁。

中村：『中国大百科全書』は紐の意味として小韻と声母の両者を挙げますが、『中国語学辞

---

<sup>6</sup> 慶谷壽信・佐藤進編訳 李思敬著『音韻のはなし ——中国音韻学の基本知識』東京：光生館、1987年。

典』は声母の意味のみで、小韻を挙げません。両者の大きな違いです。ところで、『中国語学辞典』の潘重規・陳紹棠(1978)<sup>7</sup>の指摘は興味深い。紐=声母は、章炳麟(太炎)(1869-1936)に始まるとのことです。

吉池：潘重規・陳紹棠(1978)は、中国語音韻学の用語の解説に重きを置いた書です。“声”(声母)の各種の呼称の議論において“紐”を取り上げ、概略次のように述べます。

「紐は声紐とも称する。この名称は章太炎先生が定めたものである。沈約の「神珙圖譜」で言う紐は、系連の意であり声を指すものではない。孫愐の唐韻序で言う紐が系連させるものは専ら声類であることから、章氏はこれに依り、双声を集めた字を名付けて紐とし、一字を取って標目とし「某」紐と称した。三十六字母は梵書によるものであり、字母の名は未だ定まっておらず、別に新たな名称を定めて紐としたのである。」<sup>8</sup>(趣意)

中村：この議論によると、紐=声母とするのは比較的に後出で、章炳麟「古音娘日二紐埤泥説」以降の用語のようです。少なくとも潘重規氏と陳紹棠氏はそのように理解しています。いずれにしても、紐の本質は、一定のまとまりやグループを指すものと見て大過なく、そこから紐=声母や紐=小韻が出てきたのでしょう。

吉池：私も潘重規・陳紹棠(1978)に目を通してみました。紐=声母という説のあることを紹介しつつも、下記のように自分たちの議論に於ける用語としては、「三千六百一十七紐」などとするので、紐=小韻と認識していることがわかります。

「切韻之音，凡一百九十三韻，三千六百一十七紐，系統與廣韻大體相同，其聲與韻之組織，上文已論析之。」(257頁)

ところで、章炳麟『国故論衡』(1910)<sup>9</sup>中の「古音娘日二紐埤泥説」<sup>10</sup>を読んだのですが、紐で声母を指すのか、紐で“音のグループ”を指すのか明瞭でないように見えます。例えば、同論文に次の表現が有り、同様の表現形式は他の箇所にも多く現れます。

「“任”之聲今在“日”紐(176頁)、「“狂”之聲今在“娘”紐(178頁)

これらを、「任の声(発音)は、現在、日母の紐(グループ)に在る。」とも「任の声(発

<sup>7</sup> 潘重規・陳紹棠(1978)『中國聲韻學』台北市：東大圖書公司。第3版1990年による。

<sup>8</sup> 「(四)紐：或稱聲紐，此名乃由章太炎先生所定。…略…。是沈約神珙圖譜，本爲練習四聲雙疊反切之用，其所謂紐，特繫聯之意，猶未專指發聲也。乃孫愐唐韻序云：「又紐其唇齒喉舌牙侷而次之，」則所繫聯者專指聲類。故餘杭章氏本之，因名類聚雙聲之字曰「紐」，取一字以爲標目，謂之「某」紐。國故論衡小學略説云：「舊云雙聲，唐韻云紐，晚世謂之字母。三十六母依擬梵書，要以中夏爲準。」蓋章氏亦以字母之名爲未安，故別定新名爲「紐」也。」(15016頁)。

<sup>9</sup> 初版本は、日本秀光社から1910年に刊行されたが、何度か校訂されたようである。一般に流布しているのは浙江図書館が1917~1919年に刊行した『章氏叢書』に収める校訂本であり、各種著作集もこれによることが多い。

<sup>10</sup> 汪壽明選注(1986)『歷代漢語音韻学文選』上海：上海古籍出版社所収による。

音) は、現在、日母に在る。」とも読めそうです。

中村：章炳麟の「紐」の用法は一見あいまいですが、次の箇所は「声母」としか解釈できないように思います。「“月”字古文作“外”，韻、紐悉同，則古“月”、“外”同字。」（175頁、10-11行）。この確実な例より、紐＝声母と決めて、その上で章炳麟の文章を読んだならばどうでしょう。特段の矛盾は生じないように思います。

吉池：紐＝声母は確認できるとして、紐＝小韻の用例は「古音娘日二紐帰泥説」の中に見当たりませんね。

中村：上に挙げた章炳麟『國故論衡』（1910）中の「音理論」に「唐韻分紐、本有不可執者、若五質韻中“一・壹”為於悉切、“乙”為於筆切……悉分兩紐」とあります<sup>11</sup>。ここでは明らかに「紐」が小韻を指しています。章炳麟は、紐＝小韻とも、紐＝声母ともするという事です。

吉池：章炳麟の弟子の黄侃（1888-1935）も『黄侃論學雜著』<sup>12</sup>によると、紐という語を使用します。「聲韻略説」において、一字に二音とする漢人の読音の例を挙げ、次のように述べます。「案此類，即後來一字異聲，或平，或上，去，入。一字異紐，或見，或溪。一字異韻或東，或鍾。」（121頁）。「聲」が声調、「紐」が声母、「韻」が韻母に相当することは明らかです。また、「聲韻通例」に「凡古音十九紐：影、曉、見、溪、端、透、精、清、心、邦、滂，爲清聲；匣、疑、定、泥、來、從、並、明，爲濁聲。」（140頁）とあります。この「十九紐」も十九声母に相当することは明らかです。師匠と同様に紐＝声母です。紐＝小韻の用例は確認できません。

中村：章炳麟と同時期の王国維（1877-1927）は「書巴黎国民図書館所蔵唐写本切韻後」（『觀堂集林』（1927）所収）の中で「小韻」を「紐」と称しています。「蒙紐」（＝蒙小韻）、「洪紐」（＝洪小韻）のような表現がありますし、また「紐末」（＝小韻末）に増加字があるとか、「紐首」に何の字を置いているというような表現から、王国維が「紐」を小韻の意味で用いていることに議論の余地はありません。

章炳麟（1869-1936）より前の時代の錢大昕（1728-1804）は、『十駕齋養新録』（1799）<sup>13</sup>中の「翻切古今不同」で「古書支與氏通。江南音不誤。廣韻祇岐同紐，正用江南音。」とします。この紐も小韻です。

<sup>11</sup> ウェブサイト「中國哲學書電子化計劃」で閲覧できる浙江図書館校刊本『國故論衡』による。ただし、句読点は引用者。

<sup>12</sup> 黄侃『黄侃論學雜著』上海：上海古籍出版社、1980年。

<sup>13</sup> 錢大昕（1799）「翻切古今不同」『十駕齋養新録』（自序嘉慶四年[1799]）。台湾商務印書館

吉池：紐＝小韻とする比較的新しい例として、周祖謨(1983)『唐五代韻書集存 下』があるので紹介します。“切韻”殘葉一(伯 3798)を解説した部分に次のように有ります。

此殘葉破損已甚，僅存平聲東鍾三韻字，共十六行。行間有界欄，韻與韻之間有間隔，韻首有韻次數目，並加朱圈，一韻之内，小紐第一字上則加朱點，以示分別。(807頁)

これは、所謂小韻を、周氏が「小紐」と称した例です。また、次のような一文もあります。

“廣韻”鍾韻「恭」字下注云：「陸以恭蝨縱等字入冬韻非也。」(此注當本於“唐韻”，說詳本書第五類伯 2018 考釋)。此本「恭」「蝨」「縱」三紐字正在冬韻，與“廣韻”所說相合。(807-808頁)。

引用文の「恭」「蝨」「縱」は、鍾韻の小韻代表字です。ここでは所謂小韻を「紐」と称しています。

## 6. 「條」と「紐」について

中村：ところで、今議論している紐と関わる記述が、前掲表の 10. Nagel, Paul (1942) “Beiträge zur Rekonstruktion der 切韻 Ts‘ieh-yün Sprache auf Grund von 陳澧 Ch‘en Li’s 切韻考 Ts‘ieh-yün-K‘au” に、“als besondere Silben (條 *tiau*, 紐 *niu*) aufführt” 「特別な音節(條 *tiau*, 紐 *niu*)として」と出てきます。「特別な音節」に付された注記の「條」と「紐」は何を指すのでしょうか。陳澧『切韻考』<sup>14</sup>の用語と関連するのでしょうか。

吉池：『切韻考』卷一の四葉裏に、「廣韻以同音之字爲一條、每條第一字注切語及同音字數、」とあります。また、卷六の十五葉右に、「廣韻同音之字、雖多至數十字皆合爲一條、惟於第一字注切語及同音字數、」とあります。「一條」は小韻を表します。紐で小韻を表す用法は見当たりません。

中村：そうすると、注記の「紐」は何を指すのでしょうか。

吉池：『切韻考』卷六の四葉表に、「唐元度九經字樣云、避【唐の李避：対談者】以反言、但紐四聲定其音」(唐の元度「九經字樣」に云う、李避は【反切の表記に】「反」の字を以てし、“紐四声”によって其の音を定める)とあります。「紐四聲」の意味の理解は困難ですが、同四葉裏に、「九經字樣所謂但紐四聲者、鬱字音氳入、刊字音渴平、是也。」と有ります。「鬱字音氳入」(鬱字は氳の入声で発音し)、「刊字音渴平」(刊字は渴の平声で発音する)とあるので、平上去入に渡って同じ声母が系連することを指すのであり、声母自体

---

の国学基本叢書王雲五主編、1967年印行本による。

<sup>14</sup> 『切韻考』はもと1844年刊。いま臺灣學生書局、1969年による。

を指すわけではありません。『切韻考』では、「條」で小韻を表し、「紐」で声母の系連を表します。

中村：10. Nagel, Paul (1942) の “als besondere Silben (條 *tiau*, 紐 *niu*) aufführt” 「特別な音節 (條 *tiau*, 紐 *niu*) として」の注記の「紐」は、『切韻考』の用語ではないということですね。

吉池：重紐に相当する「特別な音節 (條 *tiau*, 紐 *niu*) として」の「條」は『切韻考』の用語であり小韻を指します。これは一般的でない用語であるため、「條」は「紐」即ち小韻の意味であるとの注記したのでしょうか。この「紐」は、Nagel, Paul (1942) 当時の一般的な紐＝小韻の用法を利用したものと考えられます。

中村：錢大昕 (1728-1804) は紐＝小韻とし、陳澧 (1810-1882) は條＝小韻とし、章炳麟 (1869-1936) は紐＝小韻および声母、とするわけですね。紐＝小韻の用法について、どこまで遡ることができるか問題ですが、それは今後の検討課題としましょう。

いずれにしても、中国では紐を小韻の意味で使う用法が古くからあったが、章炳麟の流れを汲んで声母の意味でも使うようになったということでしょう。日本の学界ではもっぱら紐＝声母と認識されているように見えます。このような中国と日本の認識の違いは、重紐の紐の理解に影響を及ぼすはずです。

吉池：どうということでしょう。

## 6. 重紐の初期の用法と後代の理解

中村：「重紐」という用語の最初期の用法と、その後の「重紐」という用語に対する理解は異なることがあるので注意が必要です。

吉池：「重紐」という用語の最初期の用法とは、どうということでしょう。

中村：前掲の表 1 によれば、確認できる「重紐」という用語の初出は董同龢 (1944) ですが、この時「重紐」という用語が作られたとは思えません。04. 陸志韋 (1939) 以降、11. 董同龢 (1944) 以前の、ほぼ 5 年の間に生まれた新たな用語と見て大過はないでしょう。

そこで、06. 陸志韋 (1939) 「三四等與所謂‘喻化’」を見ると、重紐現象を“重出小韻”と表現します。09. 王靜如 (1941) 「論開合口」も重紐現象を“重出小韻”と表現します。

吉池：“重出小韻”の小韻を紐とすると、「重紐」となるということですね。

中村：そうです。「重紐」という用語が生み出された当時に限って言えば、「重紐」の「紐」は小韻であり、重出の小韻を「重紐」と呼んだと見て良いのではないのでしょうか。これが私の考えです。

吉池：「重紐」について紐＝小韻とする考えを、中村さんは、たしか、6年ほど前に「重紐の紐は声母？」と題して論評を「いろいろな話」（古代文字資料館のサイト）に書きましたね。

中村：「細かいこと」（2018.3.27）というエッセーの一部分です。上述の王国維の「書巴黎国民図書館所蔵唐写本切韻後」（『観堂集林』所収）にしたがって、「紐」が小韻の意味であるからには、「重紐」も「重複した小韻」あるいは「（同音の音節が）重出している（かに見える）小韻」と解釈するのが妥当だということを述べました。決して声母が問題の本質なのではないというのが私の意図でした。

吉池：「重紐」という用語の誕生の折に、“重複した小韻、重出した小韻”を「重紐」と呼んだのであろうとすると、議論が複雑でなく理解しやすい。最初期の「重紐」の用法はそれで良いとして、「重紐」という用語に対する後代の理解は、最初期の用法と異なる、とはどういうことでしょうか。

## 7. 重紐という用語の後代の理解

中村：前掲表1の、13.周法高(1945)「廣韻重紐的研究」では、「重紐」の「紐」に対する明瞭な説明はありませんが、紐＝声母とも紐＝小韻とも理解できます。また、16.王靜如(1948)「論古漢語之腭介音」に至ると、“重複聲紐小韻”もしくは“聲紐重複小韻”などという表現がなされ、理屈の上では紐＝声母とせざるを得ません。

吉池：中国では、紐自体に小韻と声母の二種の意味があると認識されており、それによって「重紐」の紐も理解されるので、16.王靜如(1948)のような紐＝声母とするものが出て来るのでしょうか。しかし総じては、どちらともとれる曖昧な表現になるということかもしれません。

中村：中国で出版された『中国大百科全書 語言 文字』（1988年）の、邵榮芬(1988)では重紐について「所謂重紐是指支，脂，祭，真，仙，宵，侵，塩八韻中唇牙喉音兩套對立的小韻而言。」（いわゆる重紐とは、……唇牙喉音における、2組の対立した小韻を指して言う）（321頁）とする記述は重紐現象の事実を述べたものですが、「重紐」の紐は何を指すかには言及しません。「重紐」の紐とは何かについては、あいまいです。先にこれを、紐＝？小

韻説としました。これは中国の学界での「重紐」という用語に対する理解をよく表しているように見えます。

吉池：それに対して、日本の学界での「重紐」という用語の扱いはやや異なりますね。

## 8. 日本での重紐という用語の扱い

中村：前掲表1によれば、日本での「重紐」という用語の初出は、20. 頼惟勤(1949)「重紐問題」のようです。

吉池：21. 藤堂明保(1950)「中古漢語の音韻論的対立」も「重紐」という用語を用いています。発行年は1950年(昭和25年3月30日発行)ですが、表紙と英文目次は1949年とするので、実際はどちらが早かったか微妙ですが、発行年によっておきましょう。いずれにしても、23. 三根谷徹(1953)「韻鏡の三・四等について」が「中國の學者の用いる用語」と述べるように、「重紐」という用語は中国の用語を利用したものです。

中村：日本で「重紐」の紐がどのように理解されたか確認する必要がありますね。

吉池：日本における初出は20. 頼惟勤(1949)ですが、「重紐」の紐が何を指すかということには言及しません。21. 藤堂明保(1950)は、「○奇 渠羈切 10 とあつて例字をあげた後、更に○祇 巨支切 35 が重出している。「渠、巨」は同じく頭音 g を示すのであるから、これは同紐の反切が重出したことになる。」とします。紐は声母を指しているように読めますが、定義として明言したわけではありません

中村：「重紐」の紐は声母である、とはっきり打ち出したのは、26. 平山久雄(1967)「中古漢語の音韻」です。

吉池：紐＝声母説は日本の中古音研究に大きな影響を与えた平山久雄(1967)に見えます。その後の「重紐」という用語の理解に影響を与えたのでしょうか。再度確認すると、次のようです。

「このような pair は、反切系聯の結果では下字が系聯してしまうことが少なくない。その場合には、同一声母が同一韻母と重複して結合している観を呈する。声母を<紐>ともいうので、したがって<重紐>と呼ぶのである。」

中村：その後の研究を逐一挙げることはしませんが、一つだけ挙げます。太田斎(2013)<sup>15</sup>も

---

<sup>15</sup> 太田斎(2013)『韻書と等韻図1』神戸市外国語大学・研究叢書52。

「この名称は声母に、「紐」という言い方があるところから来ている。」とあります。この紐＝声母説は日本の学界で受け継がれ、『中国語学辞典』日本中国語学会編(2022)の重紐という用語の解釈に至るのでしょう。個人的な見解ですが、このように重紐を声母の問題と定義することは、重紐をめぐる後の論争に何かしらの影響を与えたのではないかと疑っています。

吉池：どういうことでしょうか。

中村：重紐の区別が介音の差にあるという、いわゆる有坂・河野説が有力になる中で、その音韻論的解釈においては、区別を声母に帰する(p:pj, k:kj 等)説が三根谷氏によって提唱されました<sup>16</sup>。私には全く合理性がないと思われる説なのですが、平山氏以降その説が意外なほど受け入れられたのは、重紐の紐が声母のことだとする日本でのとらえ方が無意識的に影響したのではないのでしょうか。いずれ、三根谷説についても議論する機会を持ちたいと思います。

## 8. 紐＝小韻説の提案

吉池：「重紐」の紐について、中国の学界では、声母か小韻か、そのどちらであるか、あいまいです。研究者によって理解が異なるのかもしれませんが。それに対して、日本の学界では声母とするのがふつうのように見えます。

中村：紐に小韻の意味があることについての考慮はなさそうです。

吉池：これまで重紐の紐とは何かということについて議論し、中国と日本の学界では、ややとらえ方が違うようだとことを確認しました。

そこでどうでしょう、「重紐」の紐を小韻と定め、「重複した小韻」（重複したように見える小韻）を「重紐」と呼ぶとし、これを学界に（とくに日本の学界に）提案したいのですが。

中村：重紐の現象を説明する際に、韻書においては小韻という用語は有用です。しかし、韻図においては小韻という用語は不要です。そのような事情もあり、重紐の説明において、重紐という用語の理解が複雑になっているという面もあるのかもしれませんが。その点を考慮したうえで、紐＝小韻説を提案するということでしたら異存はありません。

---

<sup>16</sup> 三根谷徹（1953）「韻鏡の三・四等について」『言語研究』22・23。